

自分で限界を  
つくらない。  
挑戦することから  
すべてが始まる

ゲスト○レーシングドライバー・冒険家

# 片山 右京氏

北九州イノベーションギャラリーに  
展示されたTOYOTA F1 CARの前で

プロフィール●かたやま・うきょう

1963年東京都生まれ。83年FJ1600でレースデビュー。91年全日本F3000選手権チャンピオン。92年FIAフォーミュラ1 (F1) 世界選手権デビュー。97年までF1に6年連続で参戦。日本人最多出場を果たし、クラッシュを恐れない走りぶりから、「カミカゼ右京」と呼ばれる。96年スイス・モンブラン登頂を皮切りに世界の高峰を次々と登頂。98・99年ル・マン24時間レースに参戦、日本チーム歴代最高の総合2位。01年Team UKYOを設立し、冒険家としても活動を始める。02年世界最高峰エベレストに挑戦、パリ・ダカールラリーに参戦。07年には世界で初めててんぷら油のリサイクル燃料でユーロミルホー・ダカールラリーに挑戦し完走。自転車による日本縦断のほか、NPO団体などへの支援、チャリティーイベント主催をはじめとするボランティア活動、全国の病院や児童福祉施設への訪問などを行っている。そのほか、レース解説や番組出演など多方面で活躍中。

## スピードの熱に浮かされた レーサー時代

——片山さんはF1ドライバーとして活躍されましたが、  
どのような子ども時代を過ごされたのでしょうか。

幼いころ体が弱かったので、鍛えようと、小学校に上がるころから父に連れられて神奈川県の大山や丹沢、東京の高尾山に登っていました。3年生のときには通常大人の仕事である、荷物を山に運ぶ歩荷ほっかもやらされました。戦争帰りで厳しく怖い存在だった父は、万事

体験が一番という教育方針で、自転車の乗り方を教えるときは、いきなり補助輪もつけない自転車に僕を乗せて坂の上から「行ってこい」と背中を押したり、泳ぎを教えるときも海に放り投げるといった具合でしたが、すぐに自転車に乗れるようにも泳げるようにもなりました。殴る蹴るはしょっちゅうで、しつけの域を超えているくらいでしたが(笑)、結果的にはそのおかげで鍛えられたので、今では感謝しています。

幼いころに頑張ったことや体を使って覚えたことは財産だと思います。心技体という言葉がありますが、

人は体技心の順に覚えていくのではないのでしょうか。まずは挑戦することが大切。1回やるよりも2回やったほうが経験を積んでうまくいきます。そうして体で覚えた経験は、精神力を養っていく。だからこそ、つらい瞬間も、「まだまだ」と、あと少しだけ頑張ることができるのです。

子どものころは冒険家になりたくて、周りの友達に桜田淳子ちゃんなどのアイドルの写真を下敷きに入れているのに、僕だけは加藤保男さんなど冒険家の写真を入っていました。

最初に手に入れた冒険のツールは自転車で、「この道はどこまで続いているんだろう」という好奇心から、自転車に乗る距離がだんだん長くなり、小学3年生で東京から相模湖や富士五湖へ、5年生になると一人でフェリーに乗って東京から三重県の松阪に渡り、そこから東海道を歩いて自宅まで自転車で帰ってきたこともありました。土砂降りの中、自転車で山梨県の大菩薩峠を越えたこともあります。荷物が雨を含んでオートバイくらいの重さになり、耐え切れず何度も自転車を倒して。何時間もかけて泣きながら自転車を押して帰りました(笑)。

よく「昔から体力があったのですか」と聞かれることがありますが、小さいころからこうして体を動かしてきた「慣れ」なんです。今でも東京から静岡くらいまでは自転車で行ってしまいますよ。

思春期になって冒険のツールはオートバイになり、今まで知らなかったスピードで移動できることにすっかり魅せられました。そして18歳になると二輪から四輪へと。スピードだけではなく、コーナリングのテクニックがたまらなく楽しかったんです。車を買うため必死になって貯金し、御殿場の富士スピードウェイに通うようになりました。高校3年生になり進路指導の先生に呼ばれて今後の進路について聞かれたとき、とっさに「F1ドライバーになります」と言って大笑いされ



1997年 F1グランプリ 鈴鹿サーキットにて

©折原弘之

ました。当時はまだ日本人のF1ドライバーはいませんでしたから。その10年後、F1ドライバーになってから先生にお会いしたとき「本当になりましたよ」と言って、また大笑いされました(笑)。

——レーサーの道へと進まれ、92年に日本人として3人目のF1ドライバーとなり、鋭い走りぶりから「カミカゼ右京」と呼ばれました。

レーサーを目指したのは、スピードに衝撃を受けたことと、負けん気が強く競争が好きだからです。全身をガソリンが流れていくような、スピードの熱に浮かされた時期でした。

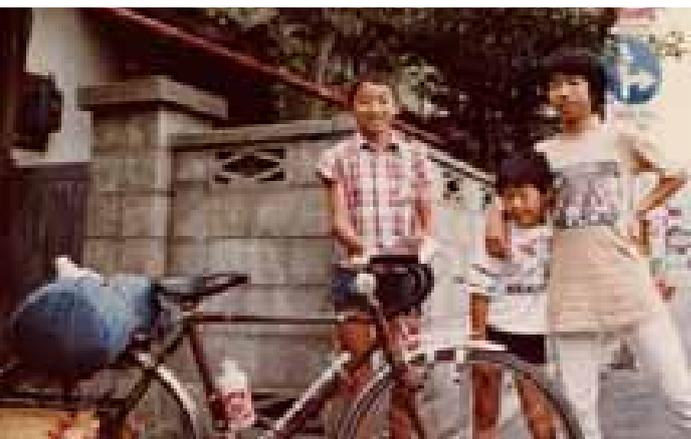
レース専門のエンジンを改造する工場にメカニックとして住み込みで働きながら、筑波サーキットで自分が買ったフォーミュラカーの走行練習を始め、レーサーとなりました。車にすべてを注ぎ込み、1週間に50円くらいしか持っておらず、タイヤやブレーキパッドを拾って修理したものを練習用として再利用していました。気がついたら、いろいろな人のおかげでF1まで行かせてもらったという感じです。

## 本当の強さとは、自身の弱さを知り人にやさしくできること

——世界に20人ほどしかいないというF1ドライバーの生活とは、どのようなものだったのでしょうか。

F1には、自分が求めるものがすべてある夢の世界だと思っていました。実際、税金のかからないモノコに住んでいたころは、スポーツカーを何十台も持ち、エルミタージュホテルで昼食に70万円もかけるような食事会に参加したこともあります。でもそんな経験をすると、月並みですが、子どもや家族、命といったお金で買えない大切なものがあることがわかります。

また、アイルトン・セナやミハエル・シューマッハという天才を見て、世界で1番にはなれないと感じました。すべての人が練習して100mを10秒以内で走れる



自転車旅行によく行った小学校6年生のころ



2008年6月19日、北米大陸最高峰マッキンリー(6,194m)に登頂

©宇佐美栄一

ようにはならないのと同じで、練習や努力ではどうにもならないことがある。世界一の才能はどんなに蓋をしても漏れてくる光のようなもので、自分は天才ではないことを思い知らされたんです。

F1引退後、負けたというコンプレックスから自暴自棄になりかけて、目的を失ってぼっかり空いた穴を埋めるため、そして挑戦する気持ちをもう一度取り戻すため、再び山に登るようになりました。山では、肩書きも過去もお金も車も関係なく、自分自身が勝負するしかありません。山に登りながら、ずっと「本当に強いとはどういうことか」と考えてきましたが、自分の弱さをわかって人にやさしくできるといけないかと思っています。

——F1引退後は、積極的に社会貢献活動をされています。

散々人に助けられてF1の世界まで行かせてもらったので、これからは人のために生きようと思うようになりました。とはいえ、登山はこれからも好きなように続けたいし、僕は聖人君子ではなくへそ曲がりなので、「いい人だと思わせようプロジェクト」と名づけてやっています(笑)。対価をもらおうと悪代官のように計算してしまいそうですが、一銭ももらわないと、「ね、いい人でしょう」と自信を持って言えますしね(笑)。

まだF1ドライバーだった96年、難病の子どもたちの夢をかなえる活動を行うボランティア団体「メイク・ア・ウィッシュ・オブ・ジャパン」から、F1ドライバーを夢見ていた白血病の子が僕に会いたがっていると連絡を受け、病室を訪ねました。そのとき、「頑張れよ、絶対あきらめるなよ」と言葉をかけたのですが、2カ月後、その子のお母さんが見えて、亡くなった事を告

げられました。「お母さん、僕は今もう死ぬ、でも病気で死ぬんじゃない。痛くてもう頑張れない。あきらめて死ぬから片山さんに謝っておいて」と言って息を引き取ったそうです。それを聞いて、馬鹿なことを言ってしまったと悔やみました。それが「頑張ることの意味」を考えるきっかけとなりました。

その後も、毎年難病と闘っている子どもたちと会い、最期を迎えるときには「頑張ったな」と抱きしめて見送っています。彼らに対して「頑張れ」という言葉は間違っているかもしれませんが、やはりそう言うしかない。だから、その分自分も頑張る努力をします。

環境面では、2006年、パキスタンのガツシャブルムI峰(8,068m)に登ったとき、5,000m地点の雪しか降らないような場所に雨が降る様子を目の当たりにし、このことを地球温暖化の一つの現象として多くの人に伝えるべきだと感じました。そこで、車を生業に



今年8月、北九州イノベーションギャラリーで行われた体験学習。富士スピードウェイと同じ形のサーキットを作り、その上を子どもたちが3回走る。限界と思ったその先に挑戦しようという片山氏の熱い指導により、全員3回目には1回目のタイムを更新した

している僕らしい方法として、使用済みてんぷら油をリサイクルしたBDF (Bio Diesel Fuel) を使ってモータースポーツをやってみようと思い、昨年ユーロミルホー・ダカールラリーに出場し、完走しました。でも、何かをやり遂げると次の問題点・課題が見えてくる。最近はさまざまな活動が点から線へとつながってきたと感じています。

来年からは、子どもたちを対象とした冒険学校(仮称)を計画しているところです。

## 答えは全部自分が持っている。 本に頼らず、まずは 体を使って動いてみる

——そうした活動を通じて、伝えたいことは何でしょうか。

自分のフィロソフィーを若い人たちにバトンタッチしていかなければいけないと思っています。僕のことを精神的に強いと言う人がいますが、僕も毎日落ち込んだり自信をなくしたりしています。結局みんな五十歩百歩で、大差はありません。頭がいい人はかえって難しく考えがちですが、頭で考えるより、ハートで感じるのが大事。映画や音楽に触れて鳥肌が立つほど感動する経験も大切ですし、また、人は好きなことに没頭するとき一番パワーが出るものです。ところが、好きなことに挑戦することに自分でブレーキをかけている人が多いと感じます。自分の中で限界をつくってしまい、お金や年齢などを言い訳にしてあきらめてしまうんですね。

以前、代々木公園でフリーライミングのイベントを行ったとき、途中で止まって動かなくなった子がいました。説得しても、「降ろせ」と言って聞きません。ご両親からも「降ろしてあげてください」と言われました。そこで僕は、ご両親には「大丈夫ですよ」と笑顔で返事した後、マイクをはずして、子どもには「そうやってお前はいつでも甘えてきたのか。今日は覚悟



しろよ。右手上げろ、足上げろ」と脅して(笑)、2人で頂上までたどり着きました。その後、その子は自分一人で登るようになり、後日ご両親からも「あれから何事にも積極的になった」と手紙をいただきました。このように、親や周囲の人たちがブレーキをかけていることもあります。また、努力しない人が頑張っている人の揚げ足をとることもあるかもしれません。でも、失敗して笑われるのを気にして挑戦できなくなることが一番いけないことだと思います。

子どもたちに伝えたいのは、物事には順番があって、まずは挑戦してみること。みんな最初から自転車に乗れたわけではありませんよね。そして、失敗というものはなくて、そこから必ず学ぶことがあるということ。本や講演などを聴かなくても、答えは自分が全部持っています。自分が体を使って動いてみたこと、挑戦して一生懸命頑張った経験を財産として、自分を客観的に見つめると答えが見えてくると思います。

自分が正しいと思ったときはしっかり発言し、戦うことも必要です。最近はKYという言葉ができるなど、その場の空気を読んで争いを避ける傾向がありますが、僕はそういうのは嫌いですね。昔は「カミカゼ」と呼ばれていたのが、今では「波風」と言われていますが(笑)、空気を読んでばかりでは、自分が小さくなったり、熱く生きられない。対話して次の時代にフィロソフィーを伝えていくこともできないし、日本全体にとって残念なことだと思います。

——八幡製鉄所を見学いただきましたが、当社の印象についてお聞かせください。

ほかにはない規模のもので、工場自体のスケールの大きさに驚くとともに、日本を支える産業としての大きさも感じました。普段商品の形になったものは目にしていますが、製鉄所の様子は、自然の石炭や鉄鉱石に生き物の命が吹き込まれているようで感動しました。世の中は鉄がなければ成り立たず、人間に必要な不可欠なものとして、子どもたちの社会科見学だけではなく、大人にも見てほしいと思いました。



子どもたちと展示を回ってF1の魅力の説明